

連載 18 戦場とカメラの眼

小津安二郎は、1924年に一年志願兵として近衛歩兵第四連隊に入営して以来、後備役勤務演習、演習召集、日中戦争応召、軍報道部映画班員としての南方派遣まで、20年にわたって戦争とかかわらざるを得なかった。兵士として戦場に赴いたのは1937年9月のことで、1939年7月16日に召集解除されるまで、中国大陸で辛酸を舐めた。

戦地では、1938年1月12日に山中貞雄のもとを訪れた。山中は、監督作品『人情紙風船』完成直後に召集されていた。南京では1938年8月、佐野周二にも再会した。いずれも内地での再会を誓ったが、山中は還らなかった。9月17日に野戦病院の療養所で病死したのである。『キネマ旬報』（1938年10月21日号）は若き俊才の陣歿を悼んで、特集を組んだ。

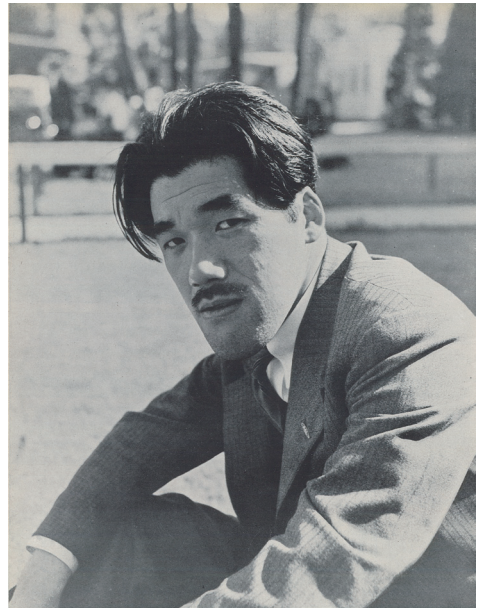
小津はその後、戦地から『キネマ旬報』に手紙を送っている。

六安では、コレラが猖獗^{しょうけつ}を極めてゐた。真症患者三〇六名、枕を並べて痩せ細つて、枯竹を折る様に、たやすく、あまた、死んで行つた。（小津安二郎「手紙」『キネマ旬報』1939年1月1日号）

アジア・太平洋戦争の死者の過半が戦病死であり、



佐野周二と小津安二郎
（『キネマ旬報』1938年9月21日号）



山中貞夫
（『キネマ旬報』1938年10月21日号）

戦況が悪化してからは内実、餓死であったと伝えられる。その一人である山中貞雄の病名は不詳だが、下痢の症状が酷かったという。「枯竹を折る様に、たやすく」死んでいったあまたの兵士の向こうに、小津が、心を許した若い友、山中貞雄の幻をみていたとも考えられる。

その半年ほどのちにも、小津は『キネマ旬報』に寄稿している。

安義を過ぎて間もなく、道路上に正規兵と土民が斃れてゐた。その傍に漸く^{ようや}誕生が来たかと思はれる程の赤坊が無心に乾麩麩の袋を弄んでゐた。散々に泣いて泣き止んだ後の、けろりとした顔つきだつた。これは誰の目にも傷ましく映つた。追撃は急で誰も赤坊に介つてはゐられなかつた。赤坊が泣き出さない裡^{うち}に通り過ぎたい気持で誰も足を速めた。四列の行軍は赤坊に堰かれて左右に分れた。巻脚絆に大きい靴。踏まれればひとたまりもない赤坊が、行軍の流の中で無心に戯れてゐた。

これは菜の花を背景に、巧まず映画的な構図になつてゐた。だがこれは、あまりにも映画的な点景に過ぎた。これにレンズを向けることのあから

さまの作意を僕は好まなかつた。僕もまた重い足を速めた。(小津安二郎「続手紙」『キネマ旬報』1939年7月1日号)

兵士たちの「巻脚絆に大きい靴」の足どりは重い。自身も歩いて歩いて歩き抜き、「足の裏は一面、十文七分ことごと悉く豆になった。足頸は腫れ上った」と書いている。

正規兵だけではなく民間人の犠牲もまのあたりにしている。それでも「行軍は赤坊に堰かれて左右に分れ」る。無惨であり、どうしようもない善悪の彼岸にあって、無言の選択である。無意味かもしれない。そ

れを、小津は「映画的な構図」「あまりにも映画的な点景」と呼ぶ。映画人のまなざしの残酷、無機質なまなざし、肉眼が見ないものをも可視化するカメラのまなざしだろうか。

撮ろうとおもえば撮れた。小津はライカ(ドイツ製の小型カメラ)を戦地に携帯していたからである。(ちなみに、田中真澄『小津安二郎と戦争』(みすず書房、2005年)によれば山中貞雄もライカとならぶドイツの名機コンタックスを携行していたらしい。)だが小津は撮らないという選択をした。「映画的な」「あまりに映画的な」点景を撮らないという選択の積み重ねのうちに、彼の戦争体験は苦く、煮詰められていく。